

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」

第10回 次 第

令和3年7月16日（金）

17時～19時（予定）

- 1 三鷹教育・子育て研究所所長 三鷹市教育委員会教育長挨拶
  
- 2 意見交換 最終報告に向けた論点整理
  
- 3 事務連絡

【配布資料】

- 1 論点メモ
- 2 参考資料
- 3 ポストコロナ期における新たな学びの在り方について（第十二次提言）  
（令和3年6月3日教育再生実行会議）
- 4 新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について 中間報告（案）  
（文部科学省 学校施設の在り方に関する研究協力者会議 新しい時代の学校  
施設検討部会（第6回資料））
- 5 今後の予定について

三鷹教育・子育て研究所「三鷹のこれからの教育を考える研究会」  
(第10回会議録要旨)

日 時 令和3年 7月16日(金) 午後5時～7時  
会 場 オンライン開催(三鷹ネットワーク大学)  
出席者 阿原 あけみ、緒方 一郎、宮城 洋之、宮崎 望  
オンライン出席-後藤 彰(座長)、佐藤 量子、柴田 彩千子、相馬 誠一、林 寛平  
事務局 三鷹市教育委員会事務局、三鷹ネットワーク大学

〈議事要旨〉

(注) この会議録は抄録であり、すべての発言が記載されているものではありません。

- 1 三鷹教育・子育て研究所所長 三鷹市教育委員会教育長挨拶  
・・・・・・・・・・・・・・・・貝ノ瀬教育長代理 秋山教育部長

(貝ノ瀬教育長が所用で欠席のため、秋山教育部長よりご挨拶)

本研究会もあと3回ということで、本日は最終報告に向けた論点整理ということを経験とさせていただきます。私も、研究会にいろいろ参加をしてきたが、毎回非常に活発な議論があり、とても勉強になる会で、参加するのを楽しみにしている。今日も、様々な議論を聞かせていただき、最終報告がどのようにまとまっていくのか楽しみである。

- 2 事務局から配布資料の確認

事務局から配布資料5点の確認

- 3 意見交換 最終報告に向けた論点整理

資料1及び資料2に基づいて事務局から説明があり、その後、意見交換が行われた。

○後藤座長：論点メモを基に、意見交換を進めていきたい。例えば1番の一人ひとりを大切に教育について(1)授業や教員のあり方、まずこれについて自由に活発にご意見をいただき、あるいは議論が必要であれば議論を進め、そして、その次に(2)という順で進めさせていただきます、なおかつ※印のところ、(1)はないが、(2)以降には個別に事務局からさらにご意見をいただきたいということも示されているので、当然それに関連したもの、もちろん関連しないものも含めて、いろいろご意見をいただきたい。また最後に、全体としてご意見を頂戴したい。とにかく思い切った発想で不可能か可能かということは端におき、こういうことが考えられないか、こういうことが考えられる、というようなご意見を頂戴できればと思っている。

それでは早速、一人ひとりを大切に教育ということで、(1) 授業や教員のあり方、今まで研究員等から様々なご意見頂戴しているが、言い足りなかったこと、新たなご意見、あ

るいは議論を交わしたいなど、ご意見等を頂戴できればと思う。

○宮城研究員：一つ話題の提供ということでお話をさせていただく。(1)の授業や教員のあり方という、学校の現場の話なると思う。

○の三つ目に、メタ認知能力のことについて触れられている。皆さんすでにご承知だと思うが、中学校だと今年度から、小学校で昨年度から、授業の学習評価の観点というものが、新しい学習指導要領に応じて変わった。それまでの各教科で4つ5つの評価の観点というものがあったが、それが新しい学習指導要領の下では3つの観点到に整理された。その中の一つに、「主体的に学習に取り組む態度」の評価がある。

まさに、今日も通知表を見てハンコを押してきたところであるが、この1学期は中学教員にとって本当に初めて、主体的に学習に取り組む態度というものを評価することになった。

実はこの評価で重要なのが、子どもたちのメタ認知能力である。(2)の最後の○のところにも、子どもたちの自己評価能力の重要性について触れているが、まさにこれをどういうふうに学校教育の中で、教科教育の中で実現していくのか、今その渦中にある。具体的に言うと、教科の学習内容だけではなく、自分自身の学びが今どういう状況にあり、これから何を学ぶべきなのか、目の前で展開しようとしている学習に対してどういうふうにそれに取り組んでいくのか、簡単に言うと、学びのPDCAを子ども自身が回していく力をつけていくことが求められている。それを、教師が見取って評価をしようというのがこの「主体的に学習に取り組む態度」という観点である。

評価の方法については1学期間、教員と随分ディスカッションをしたし、中には定期テスト、ペーパーテストで見取る方法がないかチャレンジした教員もいた。そういう中で、一つは、子どもたち自身が、自分の学習の達成状況を振り返っていくことの重要性が明らかになってきた。ポートフォリオ的に記録していくようなことを積極的にやっついていかないと駄目だろう。また授業のあり方についても、子どもたちが本当に試行錯誤しようと思えるような学習課題や学習内容をどうやって設定していくのか、最終的に本当にそこが問われると感じた。単に評価の観点が変更になったということではなく、この数ヶ月間、授業作りの根幹から、教員は問い直された時期だったと感じている。今まさに中学校で、この時間も行われていることについて、一つの話の提供ということで話をした。

○後藤座長：貴重なご意見であった。ただいまの意見に関連して他にいかがか。

○柴田研究員：今伺ったご意見の中に、ポートフォリオ的に子どもたちの自己評価能力を高めていくような記録の方法というようなお話があったかと思うが、私もそれはとても大切な視点だと思っている。例えば、今年度からスタートしたキャリアパスポートであるが、そちらがこのポートフォリオとして活用していくような、何か手を加えれば活用していける可能性というのはあるかご意見をいただきたい。

○宮城研究員：キャリアパスポート、まさにポートフォリオだと思う。実際のところは全国的には昨年度からスタートしていて、私の学園でも、学園として積み上げていけるものにしてようということで見直しをして、今年は小・中で様式を全部統一した。最終的に、これは高

校まで含んだ小・中・高の12年間積み上げていくポートフォリオになる。まさにこれはキャリア形成の過程で、子どもたち自身が、9年間、12年間かけてどういうふうに分で積み上げてきたのかということが手元に残るわけで、子どもたち自身が一目で振り返ることができるようなポートフォリオになっていくのだろうと感じている。まだスタートしたばかりなので、小学校の時はどうだったかとかそういった目線で振り返るだけの蓄積はないが、いずれ子ども達にとって9年分、12年分そろそろ時が来たら、例えば中学校の卒業時に小学校1年生の時に書いた夢を振り返って、そこから自分自身の9年間の学びについて、まさにメタ認知をしていくと、そんな使い方ができる可能性を秘めていると思う。

○後藤座長：実は私も、東京オリンピック・パラリンピックに絡めて、コーチを育成するコーチの講座に何回かお邪魔したことがあるのだが、その際にも主体的に取り組む、あるいは主体的な学びの中で、コーチが大切にしないといけないことは、その子どもたちの課題解決のヒントや答えが本人の中にあるということをやんと理解して、それを引き出して教えるのが名コーチであると、講義を聞いた。今のお話を聞いている中で、そこも大事なポイントになってくると思い出した。他にご意見等いかがか。

○緒方研究員：授業の内容で私の方から以前に話をした富士山の噴火のところをもう少し深めたいと思う。実は富士山の噴火が東南海、東海、南海地震と連動している可能性がある。いやそんなことは何百年に一度だと言っていたのが、実はこの30年間の間にあるという可能性がある。あるいは相模原市では関係ないと思っていたら、溶岩が川を伝って流れてくることがあり、これも学習のテーマにされているようである。こういう大規模災害時の災害についての対応と、季節ごとに起こる風水害がある。それから日常起こるもので、よくスポーツの最中や、クラブ活動時の雷がある。やはりこの災害の頻度、規模等、日常的に起こるかどうかということも含めて、やはり命と健康安全を守るという観点は一緒に考えていく必要があると思う。一つは分野として歴史という部分や、地学という部分もあるかもしれない。同時に、この前話した通り災害は忘れたころにはではなく、最近では、忘れないうちに次の災害が起こってくるので、これを含めていただきたい。

それから、探究であるが、既知のというか、既成の教養、あるいは科学的に何か証明されていることをどう学んでいくのか、探究していくのかということ。同時に時事というか、今現実に行われている、起こっていることに対して正解がないとか、まだ意見が対立するとか、いろんな意見があるというようなこともやはり探究していかなくてはならない。もうすでに何かの評価とか、何か定説が決まっていることを探究すると同時に、今、課題として起こっていることがどうかということもすごく大事ではないかと思う。

実は、今日お持ちしたのが、B型肝炎、命の教育という、教科書会社によっては、中に載っているものであるが、副読本が出ている。これは厚生労働省から出ている。実はこの副読本の種類を調べてみると、総務省から出ている情報的なものがあったり、それから、経産省、中小企業庁から出ていたり、消費者庁から出ている詐欺の問題などがある。教育委員会というのはそうなのかもしれないが、文科省から出ているものは積極的にやるが、こういう他の

省庁から出ているものはどこかに積み残されているというご報告も受けている。副読本というのは、やはり10年、15年ぐらいの範囲で起こったことで、こういうふうには裁判として一つ確定する、あるいは補償が生まれてくるといった、やはり今の近代、現代というよりも、より近くで行われたことに対する副読本がそれぞれの省庁で作られているので、そういうものも活用し、時事に即したものもぜひ取り入れていただきたい。

それから災害時のことだが、3. 11のときに私はまだ現職の議員で、予算委員会の最中であつた。休憩になってすぐに飛んでいったのは六小だった。六小の支援学級が一番多く、そこが気になっていたので訪ねたら、支援を要する子どもたちは、何が起きているのかわからず、保護者の方が駆けつけてきて、初めてパニックが起つたということがある。子どもたちにとっては、どこで、どんな環境でいつ災害にあるかわからない。そのようなこともやはりシミュレーションしながら対応していかななくてはいけないし、敏感に感じる子どももあれば、ことの重大さがなかなか認知できないお子さんもいるので、災害時の対応というものも考えていかななくてはならない。

今、福祉避難所というのがある。一旦体育館のようなところに避難をし、そこでここでは、対応できないという方を福祉避難所に移すケースがあつたが、今は先に福祉避難所の方に案内をしないと体育館に行つて余計ひどくなつたり、あるいはパニックになる方がいるという現実があるので、こうしたこともシミュレーションの一環として、ぜひご検討いただきたい。

それから、伝統というのは文化として残っているものだが、郷土、歴史という観点からいくと、以前にも話したとおり、石神井公園があり、善福寺公園があり、妙正寺池があり、井の頭池があつて、いわゆる標高50mのところの伏流水が出てくるころなのだが、今の杏林大学が移つたところも2万年前は沼地だつた。ただし、同時にそういう湧水があつたころには縄文時代から生活があつたということもあり、歴史や何か踏まえ最後に牟礼囃子が出てきたり、連雀囃子がなぜ急に少しテンポが違うものか起るのかということも含め、探究していく必要があると思う。

神明神社があるところと、中原一丁目は落差が35mある。極端に言うと、三鷹の水が全部中原一丁目に流れるぐらい落差があるわけだが、ここに最初に神明神社を完成した方というのは、小田原城で北条が滅ぼされ、そして、ご家来の高橋家が来て、そこに村落、一応三つぐらいあつたみたいだが、そこに開いた。それから今よくあるお名前の海老沢さんや佐野さんや岩崎さんがそこに家来としていた。でも、その後、江戸時代になると、鷹狩のところになつたということで、もう、表層的に歴史年代的に変わっていく郷土の歴史があつて、その上に伝統があるのだという、やはりそういう教科を超えた探究を進めていただきたいと思う。

○後藤座長：まさに命と健康、そして郷土の歴史、その上に立つた伝統という重要性を、ぜひこの中に反映していただきたいということである。よろしく願います。

(1)だけではなく、(2)(3)(4)などを含めて、ご意見を頂戴したい。

○宮崎研究員：私の方からは本日ご欠席の常盤先生への書面意見にある学校だけの活動だけではなく、地域での活動も含め多面的で、肯定的な評価を集積し、子どもたちにフィードバックする仕組みという考え方に大変共感しており、ぜひ実現をしてほしいと思う。

あと事務局において更にご意見いただきたい論点の中にデジタル・シティズンシップということが出ていたが、私も初めて聞いたので、ICT リテラシーと情報モラル教育のことだと理解した。

今、SNS 等で陰謀論だとか、フェイクニュースが溢れる情報過多の時代である。偏見や先入観や思い込みなどの認知バイアスや同調圧力などに惑わされずに、デジタル情報に対する批判的態度や情報を正しく選択して、データやファクトを分析活用し、適切に判断していく能力、言ってみれば EBPM に対応できるような能力ということも言えると思うが、こういったことを養うことがますます重要になっていると思う。

これは民主主義を正しく健全に機能させるための主権者教育にもつながることかと思っている。

○林研究員：いくつかあり、一つが、三鷹市の小学校と中学校の接続というのはすごく充実していると思うが、一方で、小学校と中学校の授業は大きく異なると思う。授業の仕方とかプレッシャーとか。すでに三鷹市でやられていると思うが、小学校での生活や学習の様子を中学校に引き継ぎ、学習とか生活で活用するということを入れていただきたい。

もう一つが、授業の DX を進めていただきたいと思う。紙の教科書をデジタルにするとか、プリントをデジタル化するというだけではなく、オンラインで常に繋がっていて、みんなが等しく発言権を持っていると、隣の人が何を考えているかを見ればすぐわかるというようなデジタルトランスフォーメーションがあるが、この新しい形をぜひ授業にも取り入れていただきたい。

三つ目が、ここにメタ認知能力や学びの動機付けなどについて書かれているが、非認知スキルも大切だと思い、生涯にわたって学び続け、それからの豊かな人生の基礎を築くためにはテストで点数が取れる認知スキルだけではなく、非認知スキルも大切になってくるので、ここを育てる授業をぜひ展開していただければと思う。

それから、四つ目、個別最適という話が出てくるが、個別最適というのが効率重視の考え方だけではなく、子どもたちの学びに快適さもとても重要ではないかと思う。なので、個別最適とセットで快適ということも加えていただきたい。

あと二つ、先ほど出たキャリアパスポートについては文科省の様式だと A4 でプリントアウトして紙でということになっているが、すでに 1 人 1 台端末になっているし、先生方で引き継いでいくということ、また高校まで使っていくことを考えると、一歩先にデジタルにした方がいいのではないかと思う。もう一つは、先ほど出たデジタル・シティズンシップであるが、すでにデジタル・シティズンシップという用語を使っているが、電子市民権とか、居住権とか、永住権などのエストニアがやっているものと混合される可能性があるのでデジタル・シティズンシップ教育というふうに表記した方が間違いはないので

はないかと思った。

○後藤座長：1番については、(1)から(4)まで、そして※印まで今ご意見を頂戴したが、小中一貫教育のアップデートというところも含めて何かご意見等いかがが。

○相馬研究員：最初の1回目、2回目あたりに、三鷹市の現状のデータが出たと思う。この問題を、論点を出しているときに現状がどうなのかというアセスメントをしっかりしていかなければ、結局、思いつきでみんな終わってしまう。現状シビアにやはり出していかねばいけない、そして、その第一は人口動向だと思う。これから5年後、10年後の三鷹の子どもたちの数、いわゆる全体の数、それから30代、40代、50代、60代に対してどういう傾向になるか、もうだいたいわかっているわけだが、それも資料として出ていたと思う。その辺をしっかり出しておくということと、学校の建物の老朽度の問題も出ていた。それぞれアセスメントのデータ資料があり、ゆえに一人ひとり大切とする教育が必要であるということの展開になってくるのではないか。

例えば授業や教員のあり方のところも、学校の宿題をする時間が増加、何時間増加しているのか、以前とどこと比べて増加しているのか、もっとゆっくり過ごしたい子どもが増えてきている、どういうアンケートからこの結果が出たのか。やはり、数字の裏付けがなければ検証ができないと思う。ぜひその辺も含めて考えていただければと思う。例えばその次のデジタル技術の問題等も、実際子どもたちが今の状況でどのような形で使用しているのか、それに対する満足度がどうなのか、これもデータである程度わかるのではないか。

三番目の支援を必要とする子どもたちのきめ細やかな対応ということについても、表現できない子どもが実際たくさんいるというのは何人いるのか、数字がはっきり出せないのであれば、どういう状態の子どもがそこにいるのか。それに対して、どういう手当てをするのかということも必要になってくるので、現状をしっかり出すという形も必要だと思う。

前に不登校の問題というようなことが話としてでてきたが、それらについてはまた別途、三鷹市の教育委員会に全面的に協力して、いろんな形で対応を考えていきたいと思う。ヤングケアラーもまた内部障がいを抱える子どもたちもどれくらいの人数なのか、やはりある程度調べていかなければいけない。

様々な調査というのは毎年のようにしているが、分析をしっかりしていかなければ次の一歩というのは見えてこない。身体活動等、健康についてもそうである。不器用な子がどのくらい増えているのか、いわゆる運動能力検査などをして、どういう傾向なのかということ三鷹市の子どもで分析をしっかりしていかなければいけない。先ほども出たデジタル・シティズンシップについてもその教育ということでも、子どもたちのスマホの使用時間はどれくらいなのか、これはもう全国的に様々な問題が出ていて、中学生でもすぐ応答しなければいけないということで、スマホを抱いて寝ている子どもたちが圧倒的に多いという現状もある。それらの現状がどうなのかということは、やはりシビアに分析していかなければいけない。三鷹の子どもたちの学力が高いというが、その分布の状況はどうか、高い子もいるし、低い子もいる。その低い子に対するフォローはどうするのか、結構シビアな数字が

出てきたので、それをどこまで公開できるのか、それは全体で考えていかななくてはならないが、それらを踏まえた上で、これらの対策対応というのをぜひ考えていただきたい。

○後藤座長：現状の把握と評価が大切だという貴重なご意見を頂戴した。次に進める前に阿原研究員、1番のこの(1)から(4)までで何かご意見はいかがか。

○阿原研究員：今のお話にあった三鷹の子どもたちがよくできると、私もずいぶんPTAのP連の方でいろんな会に出させていただき、全体的に三鷹の子どもたちが、東京都の子どもたちに比べても水準が高いという話を何年も何年も聞いていた。全体的にと、確かによくできる子もいるが、その反面できない子もやはりたくさんいるという現実があるので、基準は高い子に置くのではなくて、やはり平均点から平均点以下の子どもたちに目を向けてあげないと、取りこぼしの子どもたちがどうやって三鷹の中で生活して学校に通っていいのか。私はもう三鷹の学校に通う子どもがいないが、これからの三鷹の子どもたちのことを考えると、そういう子どもたちに私は少し力を入れてケアしてあげてもらいたいと思っている。

○後藤座長：それでは次に2番の方に進める。一人ひとりが大切にされる環境整備について、学校施設を除くということで(1)教職員の幸せ(ウェルビーイング)の実現。(2)学校生活の見直しというところで、2番についてご意見等いかがか。

○相馬研究員：教員の労働時間、職業満足度ということについて、三鷹市のデータはあるか。いわゆる他府県他市では数字的に見たことがあるが、それと比較しなければ、三鷹の先生方がどういう状況なのかが見えてこない。一般論で流していいのか。いわゆる日本の先生たちは目標の労働時間は最長だと言われているし、職業満足度も最下位だが、三鷹の先生方のデータ等はあるか教えていただきたい。

○事務局：労働時間ということではあるが、職業満足度は三鷹独自というものはない。基本的にはこの部分というのは、三鷹だけが高いとか低いとかそういうことではなく、三鷹の教員も合わせて、日本の教員の部分でのウェルビーイングということでのご意見を研究員の皆さんからいただいたものが出ていると考えている。

○相馬研究員：こういうデータは一般新聞等が出ているが、労働時間は三鷹の先生方はいわゆる東京都と比べてみて長いということはないか。

○事務局：一般的であると考えている。他と変わらないと思う。

○相馬研究員：だとすれば、それはそれで再度受ければいいと思う。何か問題や状況を分析する場合は、やはり数字の裏付けを出していかないと、一般論で流れてしまうのが場合によっては危険だと思う。その辺は考えていただければと思う。

○後藤座長：貴重なご指摘に感謝する。他にいかがか。

○宮城研究員：(1)(2)に絡むところかと思うが、(2)の学校生活の見直しで最後の○、手間をかける方がよいとの考え方が根強いとある。これは、何というか学校文化としては手間暇かけることが善であると、確かに根強いと思う。例えば、きめ細かな指導、丁寧な指導というのは教員にとってはほめ言葉である。それが逆に首を絞めているところもあるかと感じている。これから先の教員の働き方を考えていくと、必要になってくるのが今抱えている、

きめ細かいと言われている学校の指導の分業化であるとか、あるいはアウトソーシングや協業である。自己の中で閉じるのではなくて、学園で、小中合同でそこに取り組む、あるいは、横でいくつかの中学校と共同で取り組むなど、閉じているところを広げていくことが、これから必要になってくると感じている。

○林研究員：今のお話はその通りだと思うが、何か学校の先生たちがやるべきことではないことを他の人にアウトソーシングするというよりは、これからやはり専門家の専門知を尊重するという姿勢で社会が動いていくといいと思う。先生方も教育の専門家であるので、その専門性を十分に発揮できるような働き方ができると先生たちの自己肯定感が上がると思う。逆に、例えば子どもたちのメンタルケアや家庭のこと、それから部活動などは、先生方は素人だがやっているということになっていて、そういうのはその専門の人たちがきちんと面倒見るといって役割分担をしていくと、教員は教育の専門家として自立的に仕事ができるようになるのではないかと思う。

○柴田研究員：学校生活の見直しということで教員が手間をかける方が良いとの考え方が根強いとあるが、この手間をかけるということをシステム化していくということがこれから重要だと思う。システムを作るための手間を最初にかけてしまってそれを誰も活用できるようにシステム化して踏襲していく。例えば論点の1番に戻るが、(1)の○の4つ目、使う教材の蓄積というところであるが、例えば算数・数学の授業でつまずいたお子さんは、一斉授業がつまらなく、不登校になってしまう一定数のお子さんがあるはずである。

先々週、たまたまある定時制の高校生複数名と面談した。面談した定時制の生徒さんというのは中学校までの学習についていけなくて、不登校になってしまったけれども、高校でうまく切り替えができて高校生活は楽しいと語ってくれたお子さん方だったが、なぜ高校生活で授業が楽しくなったのかというと、先生方が個別に対応してくれて、小学校の教材までさかのぼり、しっかりと基礎から教えてくれて確認してくれた。そこで自分が、1人ひとりが大切にされているのだというような思いも育まれ、今学校が楽しいということで、中学校まで不登校だったが高校生活でうまく切り替えられたという方たちだった。そう考えると、例えば習熟度別の教材に、中学校であれば小学校と連携をして、小学校の教材もスモールステップ型のプリント教材を蓄積化して行って、きめ細やかに生徒1人ひとりに対応したプリント教材など、これからデジタル教材になっていくとは思いますが、そういったものを教員が一人から作ったり、調べるのではなく、システム化され、それを生徒に提供することができるようになると良いのではないかと思う。

○後藤座長：他にいかがか。また全体でご意見いただく時間もありますので、次に進んでよいか。

では、次3番目、スクール・コミュニティの創造についてということでご意見を頂戴したいと思う。もちろん関連して、1番とか2番に繋がることも内容としてもあるかもしれないが、ご意見等を頂戴できればと思う。

○宮城研究員：スクール・コミュニティの項目の三つ目の○のところ。地域の特徴、伝統を

活かしていくのが大事というところがあるが、まさに大事なことだと思っている。社会に開かれた教育課程という言い方をするが、地域の教育資源、例えば先ほど、緒方研究員が言われていた郷土の歴史もそうだと思うが、そういうものをどうやって教育の中に活用していくかということ、これはまさに問われているところだと思う。何度かカリキュラムマネジメントというお話をしてきたが、こういうふうに学校の中だけではなくて、地域を活かして地域ぐるみでこのカリキュラムも考えていくというのが、まさにスクール・コミュニティの創造に繋がっていく一つの切り口になるのではないかと感じる。

○後藤座長：他にいかがか。林研究員、子どもの移動を最小限に暮らせる学校というお話をしていたが、その辺りで付け加えておきたいことや、何かお話ししたいことはあるか。

○林研究員：オランダの学校を例に、朝早くから夜遅くまで子どもたちが体育館などで地域スポーツクラブの活動に、放課後に参加できるというような形で、保護者が家に帰って子どもの面倒を見なくてもある程度長い時間預かっていられるということをご紹介したと思う。そういう意味でも特に中学校の部活などでこれから拠点化とか、指導できる人が少なくなってきたり、子どもの数が減ってきて、隣の学校に行かないといけないということも出てくると思うが、そのときに、学校の都合で集めるということではなく、できるだけ子どもたちが移動しなくてできるような形でできるといいというのが、子どもの移動を最小限にというところで、暮らせる学校というのは、その朝から晩までいろんなアクティビティをいろんなアクターが学校に入って行っているということで、子どもたちの安全が確保されつつ、保護者も安心して一日子どもを預けられるというような施設になっていくといいのではないかとということであった。スクール・コミュニティで、学校とコミュニティが今分離されて、どっちがどっちかというふうに言っているが、これがまさに融合していき、もう学校という概念がどんどん広がって、地域と地続きになっていくような形が想像できるとすごくいいのではないかと思っている。

○後藤座長：本当に学校が地域のベースというような考え方があるかもしれない。今のスクール・コミュニティの創造についていろいろお話を頂戴してきたが、そうすると次の4番のこれからの学校施設のあり方とも連携し、関連してくる。いわゆるスクール・コミュニティを進めていく上で当然、学校施設のあり方も含め、関連して捉えていくことが重要かと思ったので、3番も、4番のこれからの学校施設のあり方ということも踏まえて、ぜひ活発なご意見等を頂戴したい。

○林研究員：施設の方にもぜひ「快適」というものを入れて欲しいと思う。資料にあるような新しい学校施設のあり方の報告書も文科省の方から出ていたが、一部所々に快適と出てきているが、キーポイントのところには出ていなかった。快適さはこれから機能の一部として非常に重要な役割を果たすのではないかなと思っているので、ぜひ学校施設のあり方のところに快適さを入れていただけるとありがたい。

○後藤座長：私もスクール・コミュニティと学校施設のあり方を関連して考えていたときに、先生方の研修や、学びのことを考えていくと、例えば中学校などはもう大部屋的な職員室で

はなく、教科ごとのそれこそ研究室みたいなもの、日常的に先生方がそこでいろんな教科に関する意見交換ができ、共有できるスペース、あるいは小学校でも学年ごとにきちんと話ができるような職員室、研究室というか、そのようなものを作ったり、あるいは今度逆に大きな部屋の中で子どもたちと先生方と地域の方々、保護者の方々が自由に交流できるような場があったり、そのような何か新しい発想はいろんな場所も空間も必要なのかと感じていたがいかがか。いろいろと意見を頂戴したい。

○緒方研究員：いろいろなスクール・コミュニティとあわせて、連携というのがあり、例えば北野小学校で芝生を養生されるというのはプロの方というか農業の方がきている。羽沢小学校は、水の排水をどうするのだと、消防や、そういう方々と連携をする。駅に近い三小のような場合には、商業施設と何かと連携をするというようなところがある。

子ども食堂というのがあるが、小中だけの給食施設があるなら、この子ども食堂、むしろ給食センターで時間をずらして NPO の人が来て使ってもいいのではないかなという福社との連携、商業等の連携、農業との連携、天文台や大学というところの連携もあるが、そういう連携を受け入れられるような、施設構造が常に求められているのではないかな。今までは学校に誰かが入るとセキュリティーのことがあったが、そういう方々が何かプレートか何かつけるかして、普段から出入りをし、土まみれの方、白衣の方、あるいはジブリのデザインの人だったり、そういうことが常に学校の中で、体感体験できるようなそういうスクール・コミュニティと同時に、施設管理というか、施設オープンというか、そういったことをぜひやっていただきたい。

だから、連帯というと古い言葉になるが、共同ではなく、共に何かを作り上げる意味では共創の一つの形として、子どもたちも創造の担い手になれるというような形になっていけばいいと思っている。

○座長：貴重なご意見をいただいた。他にいかがか。

○柴田研究員：3番のスクール・コミュニティの創造と4番のこれからの学校施設のあり方ということに関して、例えば、子どもたちに文化的なものをしっかりと届ける体制も必要ではないかと思う。三鷹市は美術館、博物館が複数あるので、例えば天文台とか中近東博物館とか、各大学がもっている文化財資料とか、そういうものを移動博物館というような形で、各学校の何か教科の単元に合わせたテーマとして巡回するとか。そうすると休み時間などに子どもたちが文化的なものに触れる環境ができるということで、学校施設の博物館化ということも考えたら面白いのではないかな。

それから、スクール・コミュニティということに関して、先ほど緒方研究員から防災教育のお話をいただいたが、まさに防災教育というのはスクール・コミュニティの中で展開していくということが望ましいと考える。やはり防災を考えるときに必要な視点として、誰もが自分は大丈夫とか、自分は何とか生き延びられるだろうというような、正常性バイアスというものが優位に働きがちであることがある。地域の防災教育を地域の方たちと一緒に学ぶことで助け合いの体制を構築していきながら、人と人との繋がりの中で、正常性バイアスと

いうものに対する危機感をしっかり持って備えなければならない。自分はどう行動していったらいいのかというような、正解が一つでないような行動計画というものを複数想定できるような教育を地域とともにスクール・コミュニティの中でやっていくことも、一つ重要な観点なのではないかと思う。

○後藤座長：貴重なご意見をいただいた。本当に大切なことがたくさんあると思う。他にいかがか。

○宮崎研究員：スクール・コミュニティの創造についての二つ目の○で時間と空間をフルに活用した学校というような項目が出ている。

本日の資料にある長野県の例、あとは資料4の将来の学校施設の姿、こういったところを見ると、共創空間だとか、地域連携協働室というような前回の渡邊先生の発表にも出てきた共用空間やコモンスペースがゾーニングされている。これからの三鷹市の学校も含めた公共施設のリニューアルと統合再配置に向けて、アメリカのフルサービス型の例や、イギリスのエクステンディッドスクールなどを参考にし、コミュニティ・スクールが子どもたちや地域社会のウェルビーイングを実現するプラットフォームになるために、子どもの学習環境の向上に加えて、放課後の居場所や生涯学習、スポーツ、芸術文化活動、生活支援、地域ケア、防災拠点等の複合施設空間を、これは横の広がりなのであるが、この縦の24時間2部制、3部制といていた、そういった時間のフルに活用したものにすると。そこでは行政の縦割りでは難しい運営と管理の一元化というような課題をしっかりと解決し、さらに関連施設のネットワークによって広がりを持たせることができれば良いのではないかと考えた。

スクール・コミュニティの創造について、最後に子ども家庭福祉との連携も必要と出ているので、例えばどんなことがあるのかと思ったところで、コミュニティ・スクールにおいて、例えば地域未来塾など、地域学校協働活動が展開をされている中で、スクールソーシャルワーカー、三鷹ではスクールカウンセラーを兼務しているが、これがもっと常勤化されて、チーム学校として教育、教員をバックアップするために貧困家庭の児童生徒、子ども家庭支援ネットワークの関係機関と情報共有して支援して、虐待やいじめ、不登校等問題行動を防止するとともに、家庭教育支援も含めて教育格差を解消していくようなことができるといいと思った。

あともう一つ、先ほど社会に開かれた教育課程を実現していくという中で、資料の3に教育再生実行会議の第12次提言というのがあり、その38、39ページに、子どもの育ちを社会全体で支えるための取り組みということで、社会教育の魅力化みたいところが入っている。令和2年度から社会教育士という資格がスタートしたと書いてあるので、これについては例えば教員がそういった資格を取得したり、地域の教育資源を有効に活用して、先ほど言った社会に開かれていく教育課程をより効果的に実現する学校教育活動を行うことや、公民館主事や地域学校協働活動推進員等が社会教育士の称号を取得し、学校と連携して魅力的な教育活動を企画実施する、こういったことを考えておられるが、これが今後どんな広がりを見せるのかということも非常に興味深い。

○後藤座長：貴重な意見をいただいた。だんだん時間が迫ってきたので、この論点メモ1番から4番まで全てを含め、全体としてそれぞれ貴重なご意見等を頂戴したい。

もちろん感想も含め、全体通して皆様いかがか。

○宮城研究員：全体を通してではないが、最後の学校施設のところで、本当に思いつきというか夢みたいな話になるかもしれないが、教育長からもお話があったコモンズについて一言述べておきたい。学校3部制の第3部は学校の施設を地域へと開いていくといった構想であるが、今現在、学校の施設開放は体育館や校庭、会議室など限定的である。ただ、よく考えてみると学校の施設はそれだけではなく、例えば音楽室、理科室、技術科室、家庭科室、美術室もある。いや、セキュリティーはどうするのだという話にはなるが、それらの教室をオープンにしていくことも可能ではないかと思う。だからそれができるような環境整備をしていくということが、学校施設の今後を考える上で一つの課題になってくると思う。本日の冒頭では、長野の高校の例としてギャラリーの紹介があった。学校の施設の中に、地域の方々の作品を展示するギャラリーをおくとか、あるいは、学校の音楽室を開放しておやじバンドがライブ演奏をすとか、そういう地域の方々のまさに小さなコミュニティの活動が、学校の中で見えるような形になっていくということがもし実現されるのであれば、それ自体が子どもたちにとって一つのロールモデルになっていくという可能性があるのではないか。そうすると、第3部と学校教育がWin-Winの関係になっていくことも期待できると考える。

○後藤座長：まさにコモンズ、学校3部制になったら、学校側に住みたいという人が増えてくるかもしれない。どちらかという学校は運動会の放送が大きくてうるさいとか、体育館の活動が響いてうるさいとか、割と苦情が来ることはよく聞くが、逆になる可能性が今後出てくる。他にご意見等いかがか。よろしく願います。

○林研究員：最初に緒方先生から、あと相馬先生からもお話があったが、エビデンスに基づいた政策立案をしていくときの課題となっているのが、例えば先生方の就業時間が何時間かというのを調べようと思ったときに、いちいちアンケートを作っていくまでにはお願いするというような形で、毎回新しく仕組みを作って回さないといけないということがあると思うが、こういうデータが自動的にとれるような仕組みを仕組んでおくということは、これからの政策立案のPDCAを回していくことですのでごく大事であると思う。

例えばその出退勤の記録を自動で付けるとか、あるいは先生方のポータル、イントラネットなど使っていると思うが、そちらに定期的に月次でこういうアンケートをするなど、そういう仕組みが回っていれば、比較的、追加で何かまたアンケートがきたというような形でできるようになるのではないかと思うと、子どもたちの評価やフィードバックということもあるが、この学校政策、教育政策の振り返りや、フィードバック、改善のルーティンという仕組みを埋め込んでおくことがあるとすごくいいのではないか。

○後藤座長：本当にその通りだと思う。

それではここで、佐藤研究員、せっかく貴重なご意見の資料をいただいているので、こちら

に関連した形でご説明も含め、ご意見としていただいていると思いますので、お願いします。

○佐藤研究員：学力の面ではたくさんの取り組みをされて進んでいることも多いと思う。子どもたちを見ていて感じるのは、とても不器用な子が増えているということである。生きてく力、生活力をどんなふうに養っていくのかということを考えることも大事だと思う。小中一貫で9年間あるので、9年間の間の体力作り、自分の身体を知り使えるようにする取り組みを行っていくことも大事である。

また、最近、高校生で対人恐怖的なことを訴える生徒に出会うことが増えている。授業がオンライン化され、集団に入らず、人と会わずにすみ、自分はやはり人付き合いが苦手だったということを自覚した。このまま授業をオンラインで受けられるほうが、気持ちも楽だし勉強に集中できるから、オンライン授業を続けて欲しいという生徒が多くなっている。集団の中にも安心できる、個別のスペースが保障されるような教室の作り方等、そういったものが何か工夫できないかと思っている。

今、どこの地域も少子化で、子どもにとっては常に大人の目があるということも多い状況だと思う。目が行き届いて良いことと思うが、子どもが大人によって準備された中でやるという機会が多くなっている。施設には、中高生のボランティアが来ることがあるが、ボランティアをしようという思いはあるものの、指示を待つ姿勢が多いという印象を持っている。小中高生はとにかく忙しく、そして次々にやることも準備されていて消化不良のように感じることもある。企画・準備をする段階から、地域の人たちと一緒に活動することが大事なのではないか。例えば、学校ごとにお花を育ててはどうか。私が関係している学校は私学で、校内にバラの木がたくさん植えられている。バラを育てることが上手な先生がおられて始められたそうだが、5月になると校内にバラがいっぱい咲く。地域の方々には、バラ祭りとして公開するということもある。各学校単位で違う花を育てたら、気持ちを育てることに つながり、また一年間を通して市民のみなさんもお花を楽しめるのではと考えた。

施設のあり方については、本当に来て欲しい人が来られないとか、本当に利用して欲しい人が来られないということがあるかと思うので、何があると利用しやすくなるのか、利用したくなるのか、望んでいる設備とはなんだろうと思うと、学校に行くとフリーWi-Fiが使い放題になるなど、そういうものもあつたらいいかと考えた。

○後藤座長：貴重なご意見であった。他に皆様いかがか。

○相馬研究員：学校施設のあり方というのは、私ももう開放し、地域の中に本当にコミュニティとして、一緒にコミュニティ・スクールを推進するというのが皆さんと同じ意見であるが、やはり、2001年の大阪教育大学附属池田小学校の事件を思い出した。アメリカやオランダあたりではスクールポリスがいる。逮捕権はあり、ただ武器の使用権はないという状況だが、荒れている学校ではそういう状況も必要なのである。三鷹はそうではないと思うが、安全安心というのは、コミュニティ・スクールの段階で、どうだろうかということをごどこかで入れておかないと、と思う。大阪教育大学附属池田小学校の事件があつた時、たまたまその校長先生と懇意にしていたので、今でもやはり引きずっているような問題を抱えている人

がたくさんいると伺っている。この間、横浜の方でも事件があったし、諸刃の刃というか非常に難しさもあるので、安全安心の問題でぜひどこかに押さえていただきたい。

○後藤座長：他にいかがか。

○緒方研究員：連携で言い忘れたこと、芸術芸能の方々との連携である。実は、市内だけでも講談の方や、朗読の方、それから明星学園の太鼓、それから少し広げると、武蔵野芸能劇場のあやつり人形結城座の方がよく自分の稽古場を使っているが、舞踏などがある。ジャズやいろんな演奏的なこともある。やはり、在住の方や近在の方々、あるいは三鷹の施設を利用されていることで著名な方がいらっしゃる。そういう方との連携、単にその芸や、何かを見るだけではなく、そういう方たちがそういうなりわいまで至った経緯をお聞きすると、そういった方面に行かれる子どもたち、あるいはそういうところで何か刺激を受ける子どもたちが必ずいるので、在住在勤の芸能芸術の方との連携もぜひ検討していただきたい。

○後藤座長：他にいかがか。

○林研究員：教員のウェルビーイングのところの一つ入れていただきたいことがある。教職員が自発的な職の向上を促すための研修機会の確保とその支援がなされるとよいと思い、すでにされていると思うが、さらに、これからの新しい時代に向けて、例えば海外の先進的な教育事情を学ぶ機会や、海外に行って学ぶ機会や、それから探究学習の指導方法を学ぶ機会などが、こういうところに入ってくるといいのではないかと思ったのでお願いします。

○後藤座長：それでは大体議論も尽きたようであるので、ここで意見交換を終了させていただきたいと思う。貴重なご意見をいただき感謝する。それではこの後、事務局から事務連絡をお願いします。

#### 4 事務連絡

○事務局：議論していただき、またさらに、いろんな観点から三鷹のこれからの教育を考えていくことができると思い、本当に感謝したい。

次回以降のご説明をさせていただく。資料の5、今後の予定についてというものをご覧いただきたい。次回、第11回の研究会になるが、今回は間隔があかずに、2週間後になるが、7月30日15時から17時、三鷹ネットワーク大学で行う。今日ご意見いただいたことを踏まえ、最終報告の素案というものを、お示しができるようにしていきたい。また、それをご覧いただきながら、ご議論いただければと考えている。

その次、いわゆる研究会の形で行われる最終回になるが、第12回は8月20日金曜日に、場所は、三鷹ネットワーク大学で行うので、資料のご訂正をお願いします。

また、最終報告の案についてということで、最終確定に近い形で、そこでもご意見を反映して完成形にしていきたいと考えている。

なお、第13回はプラスアルファに近いところがあるが、三鷹教育フォーラム2021とあわせて行う。全国コミュニティ・スクール研究大会 in 三鷹として、三鷹市公会堂他、市民

センター周辺で、11月6日に行うので、研究員の皆様には、この研究の一旦を発信するという機会でもあり、ぜひご参加いただけたら幸いと考えている。当日コロナの状況でどうなっているか全くわからないところがあるので一応、オンラインでも中継ができるような形を整えるということで準備をしている。

○後藤座長：それでは、本日の会議をこれで終了させていただく。